科目区分：音楽文化コース
授業科目名：声楽④

地域の音楽文化を担う基礎的能力の育成

音楽教育講座・木村　勢津

Ⅰ　授業の概要

１.目的

地域の音楽文化の発信者として，また，担い手として，演奏を通じて，聴き手に共感を与える音楽を提供するための表現方法ならびに歌唱技術の修得と目的とする。

２.到達目標

(1)楽曲に適した歌唱法を用いて美しい日本語の歌唱が行える。
(2)楽曲について，日本歌曲の歴史を踏まえ，見識に基づき記述することができる。
(3)音楽を愛好する心を歌唱表現できる。

３.授業の位置づけ

本授業は，音楽文化コース３年生を対象とした授業で同コースのカリキュラムマップにおいては，「発展」に位置するものである。

２年前期・後期でイタリア歌曲全般を，３年前期では，ロマン派前期までのドイツ歌曲について学びの機会が設定されており，西洋音楽の発声法や言語と音楽の関わりとそれぞれの特徴を学び，日本歌曲に至るカリキュラムが組まれている。カリキュラムマップで「発展」の位置づけにある本授業では，楽曲へのアプローチの仕方や歌唱の基礎技術の修得に主眼を置いた基礎的位置づけから，母語である日本語により自らの楽曲に対する解釈や歌唱意欲を積極的に表出すること，演奏以外の視点から，聴き手と演奏者が音楽を共有できるための工夫について考究することができる能力の養成を目指している。

４.受講生の状況

受講者数は８名で，全員が「声楽①」から「声楽③」までを既習しており，アウトリーチ等の音楽活動を通して地域社会と結びついた経験を有している。声楽の実技で卒業研究を行う予定者はいない。

５.授業形態と受講課題

授業者が作成した日本歌曲の歴史に関するテキストを用いて，創世記から現代に至るまでの流れを概観し，各時代を代表する作曲家とその作品の特徴ついて概説を行った。

歌唱演習は，各グループ４名の構成で２班に分け，隔週で個別指導を実施した。個別指導の楽曲は自由選択とし，授業終了時の実技試験までに最低３曲の日本歌曲を暗譜で歌唱できること，中間発表，期末試験の楽曲については，プログラムノートを作成することを義務づけた。更に，個別指導受講に際しては，各自が歌唱演習曲に関する詩人，作曲家，作品等について調べ学習したことを発表する形式で授業を展開した。

Ⅱ　地域の音楽文化を担う基礎的能力の育成

１.本授業に関わるDPと授業改善のポイント

本授業に関わる音楽文化コースの DP は次の２項目である。

３．地域社会における音楽文化振興に貢献するために，高い演奏技術と豊かな音楽表現力を身につけている。
４．音楽文化に関する自己の学習課題を明確にして，理論と実践を結びつけた主体的な音楽活動ができる。

授業者は，地域社会における音楽の指導者として，また，演奏活動を核とする音楽文化を牽引する者として求められる基礎的能力として，演奏技術や音楽表現力を修得することは言うまでもなく，コミュニケーション能力，とりわけ状況に応じて適切な表現を行うことができる社会言語能力の育成が重要であると考えている。

本授業では，e-ラーニングを活用し，下記の視点を中心に設問を行い，受講者が自分の意見を端的にまとめ，文書化できる能力の育成を図った。

① 演奏における独自性
② 授業者の個別指導の要点
③ 他者の演奏楽曲に対する自分なりの楽曲分析や解釈
④ 他者から学んだ表現方法

授業者は，次回の授業までに提出物に関するコメントを全員に返信するよう心がけた。

更に，聴講者（他の受講者）の前で，個別指導を受ける楽曲について，その特徴や聴き所を約２分間でスピーチするという課題を課した。また，「声楽①」から継続して実施しているプログラムノートの作成に当たっては，発展段階として，調べ学習の域に留まらず，内容の精査と読み手の立場で理解しやすい文書の作成を目標とした。

２.授業評価と改善の成果

授業改善と関わる１）DP 対応学生認識調査，２）最終回に実施した授業評価アンケートの結果は以下のとおりである。

１）DP 対応学生認識調査
登録学生８名の内７名の回答である。

a.自己の学習課題の明確化
全員が「とてもそう思う」と評価している。

b.自分の専門分野の知識
「とてもそう思う」が 86%（6 名），「ある程度そう思う」の回答１名で，ほぼ全員が専門分野の知識との関わりを肯定している。

c.理論と実践を結ぶ主体的学習
「とてもそう思う」は 70%（5 名），「ある程度そう思う」（2 名）の回答を加えると，ほぼ全員が主体的学習を肯定している。

d.授業外学習時間（課題）
受講生の平均学習時間は 2.43 時間であった。今年度前期に全員が受講した「声楽３」は，1.88 時間であった。

e.授業外学習時間（自発）
平均学習時間は 1.86 時間であった。同上の「声楽③」では 0.94 時間であり，自発的授業時間外学習時間は２倍となっている。

f.自発的読書
「声楽③」で平均 2 冊であった自発的読書は 2.57 冊にやや上昇している。

g.自発的活動
「声楽③」では 0 件であったが，３名の受講生が各１件の活動を行っている。

２）授業評価アンケート
設問は授業の目標に関する到達度と専攻や専門領域との整合性を問うもので，指標は１を正，５を負の方向として５段階に設定した。なお，登録学生８名全員から回答を得た。

h. 母語としての日本歌曲を歌うことの意義の理解
「よく理解できた」63%（5 名），「ほぼ理解できた」37%（3 名）のいずれかに回答している。

i.演奏するための楽曲分析の方法や楽曲の特徴を感得する方法についての理解
「よく理解できた」63%（5 名），「ほぼ理解できた」37%（3 名）のいずれかに回答しているが，「h.母語としての日本歌曲歌唱の意義の理解」における回答と一致してはおらず，その整合率は 80%である。

j.専攻や専門領域に適合した内容
全員が専門領域に適合した内容であったと回答している。その理由を大別する以下のようにまとめられる。

〇歌とピアノ伴奏の関係がよく理解できる内容で今後の活動に役立つ。
〇音楽の感じ方，表現の手段を多く学び，身につく内容であった。
〇楽譜を読み解くことに対する姿勢を感得できた。
〇声楽に限らず，演奏全般を通じての基本となる内容であった。

上記の結果から，本授業では，母語で表現する日本歌曲の学びにおいて，自己の学習課題について明確に理解し，理論と実践を結ぶ主体的学習に積極的に取り組もうとしている姿勢が読み取れる。具体的学びの方法への理解や，楽曲の特徴を感得し表現しようとする姿勢の構築には，e-ラーニングを活用した毎回の授業の振り返りが効果的であったと推測される。前期に比して，課題学習，自発学習共に授業時間外学習の増加が認められ，授業への積極的参加の姿勢と読み取れる。

しかし，シラバスや授業時間内の書籍の紹介にもかかわらず，自発的読書の傾向の上昇率は必ずしも満足いく数値ではない。プログ

ラムノート作成時に用いた参考文献の状況を見ても，多角的視座からの楽曲に対するアプローチを試みている学生と，安直に情報を得られるインターネット等に頼る学生との格差が感じられた。

３.受講票から読み解く学生の成長

欧米の言葉を用いて歌唱した「声楽①」～「声楽③」の受講時，ほとんどの受講者は，言語の発音，詩や異文化への理解が活動の中心となり，演奏を通じて，自らの考えを発信することが精一杯の学習活動であった。授業開始時は，母語である日本語での音楽表現を安直に考え，表面的な読譜に終始する傾向が認められたが，回を重なる毎に，互いに意思や感情，思考を伝達し合うことこそが，コミュニケーションであり，聴衆と交わってこそ生で演奏することの意義があることを感得できる学生が認められるようになった。

第 12 回の受講票で『今日の授業では，聴衆者の立場となって客観的に他者の演奏を聴き，自分の演奏は人にどう聴こえていたり，伝わっているのだろうと考えることが出来ました。～中略～自分の演奏を客観的に見聞きできるもので確認すると，思っている演奏と全然違っていたり，伝わっていなかったりする～中略～自分が伝えたいことを一番に考えて歌うことを実践する方法を練習でも実践していきたい～』と記載した学生がいる。個別指導において「何を聴き手に伝えたいのかと表現したいか」を常に問い続け，聴講者に「どのように聴き取れたか」を述べさせることにより，聴衆を意識下において演奏することを習慣づけようとするものであり，その後の受講票から，練習方法等の工夫や改善が顕著に認められた。

また，別の学生が，第 14 回の受講票に以下のように記している。『歌をどう表現するか考えることは，地域社会において自分をどう表現し，他者とどのようにコミュニケーションをとるかということと同じだと感じます。歌において，心に持っているイメージや思いを正しく他者に伝えるには，ただ詩を読み音符に沿って声を出すだけではいけません。同じように，地域社会の中でも，「どう表現するか，どの表現が適切か」ということを判断することの重要性が見えてくると思います。～中略～物事（歌の場合は作品）を多面的に捉えることは地域社会の今ある位置を確認することにも繋がると思います。』

授業後半では数回にわたり，自分たちの学びや演奏と地域社会における音楽文化と関わりについての発問を行ったが，その最終回のコメントである。この授業における学びの成果として認められる一例である。

Ⅲ 「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について

１．ＮＰＯ法人の活動への学生の参加

2013 年に質の高い音楽を誰もが身近に楽しめる地域社会における音楽文化の環境づくりを目指し，ＮＰＯ法人を設立し，継続的に活動を行っている。地域社会における安価で親しみやすいコンサートのほか、自らコンサート会場に出かけて音楽に触れる機会の少ない人たちにもトップアーティストの演奏に触れてもらえるようアーティストから出向いて行うアウトリーチ活動も精力的に行っており，設立以来，今年２月末現在で，定期公演 16 回，アウトリーチ活動も 18 回を数える。

設立当初より学生はボランティアとして，当日の運営に参加し，国内外においてトップレベルの演奏に触れるばかりでなく，彼らとの交流を通して，その専門性に間近に触れ，価値観や音楽性について学ぶ機会を提供している。

アウトリーチ活動への学生の参加は，一般の方を対象とした演奏の機会がほとんどである学生に，自らコンサートに出かけて音楽に触れる機会を得ることが難しい人たちと，音楽を通じて，人として触れあうことの大切さを体感する機会を提供している。

２．学生によるアウトリーチ活動と問題点

松山市内の老人福祉施設や四国がんセンター等，演奏を通じて，地域社会に貢献できることを体感できる場の提供を継続的に行っている。学生にとって，音楽を通じて社会との繋がりを感じる大切な機会となっているが，対象者に相応しいプログラムの構成，質の高い演奏提供に対する意識の育成等の課題がある。また，必ずしも社会的コミュニケーション能力の高い学生ばかりでなく，その育成も今後の課題として，担当する授業でその育成に努めている。